

PRO-LIFE

中絶に反対する運動

1998年2月 No.88

胎児を守る運動

エイズとコンドーム

後天的免疫不全症候群（エイズ）のこととなると、「安全なセックス」など全くないのです。コンドームが安全なセックスを提供してくれるなどと宣伝することは、無責任で誤解をもちたすことです。

そのことは声をあげてはつきりと伝えなければならぬメッセージです、というのは、今までにそのような広告を採用したことがない雑誌にコンドームの広告をする言いつとしてエイズが利用されているからです。

このように強い調子で言う理由は避妊にコンドームがどれだけ有効かを少し考えてみればすぐにお判り頂けるでしょう。いままでもコンドームを使用して実際どれだけエイズウイルスの感染があったか誰にもわかりません。だから、避妊のためのコンドームの有効性が推測をしなければなりません。避妊の専門家はコンドームの有効性を97%だとしています。つまり、何年か使用すれば、百人に三人の女性が予定外の妊娠をすることに なります。しかし、彼らはまたコンドームの常用者に関して是有効性を90%としています。それは、もう子どもがいらずに避妊をコンドームに依存している女性の百人

に十人が使用を始めて最初の一年間に予定外の妊娠をすることになります。

「そんなに悪くないじゃない。とおっしゃられるかも知れませんが、ここに問題があるのです。そのような妊娠率は、周期的にめぐってくるごく短期間にだけ妊娠可能な女性に關してのものなのです。しかしエイズウイルスは毎日感染が可能なのです。端的に言って結論は、もし避妊のためにコンドームを常用している人が10%の割合で予定外の妊娠を経験するならば、エイズを防ぐためにコンドームを使用している人がエイズウイルスに感染する割合は少なくとも40%、そして1年間で恐らく70%にもなると予想できるといふことになります。

ここで、どのようにして私がこの数値に到達したかをおしらせします。

(1)まず、10%の失敗率があること(2)次に、40%という数値に関しては、平均的な妊娠可能期間を1週間としましたがそれは控えめな数値です。精子の生存期間を5日間、排卵の期間を10日間、卵子の生存期間は2日としました。実際、3日以上生きている精子はほとんど

いません。

そのことは、平均的な女性は平均28日周期のうちで最大25%まで妊娠が可能だということの意味しています。しかし、エイズウイルスが感染可能な期間はその4倍ということになります。したがって、10%の失敗率を4倍して、ウイルスの感染率40%ということになるのです。

もし多くの専門家によって用いられている精子の命は3日間、卵子の命は1日という数値を使用すれば、平均的な女性は、平均28日の妊娠周期のわずか7分の1、つまり4回しかセックスをしなくても妊娠することが可能ということになります。それを基準にすれば、エイズウイルスに感染する期間は、妊娠可能な期間の7倍になります。そして10%のコンドームでの避妊の失敗率が、コンドームを使用してもエイズウイルスに感染する割合の70%にまで跳ね上がらざるをえなくなるでしょう。

繰り返せば、結論はこういふことになります。エイズに感染している人と定期的にセックスをしている人は、百人の内少なくとも40人、恐らく70人までもが1年以内にエイズウイルスに感染すると予想することが出来ます。残りの人は2年ないし3年以内にウイルスに感染すると予想できます。

もちろん、このことは全て正常なセックスのみに当てはまります。

同性愛者に典型的なアナルセックスにコンドームが用いられた時は、コンドームの破損率が増加したり、その他の生理学的な要因のために感染率はぐっと高くなります。

ちょうどロシアンルーレットをする時、ピストルの薬室が空になつていけば無事なように、コンドームがエイズウイルスの感染をいくばくかは防ぐことができることは認めましょう。しかし、20の薬室のある大きな弾倉のついた回転式拳銃を想像してください。もし19の薬室が空だとしても、ロシアンルーレットをすることが責任ある行為でしょうか。そのような回転式拳銃が発明されたならば、信頼できるとされている新聞や雑誌はその新しいロシアンルーレットの広告を載せるでしょうか。

「安全な」または「より安全な」セックスを提供してくれるものとしてコンドームの広告を載せることは無責任で誤解を招くことです。むしろ、雑誌は安全なセックスなどないという公共広告のサービスをこなすべきなのです。

メディアを動かしている人々が、職員や友人をエイズで失ってしまった前に貞潔を促進する決意ができることを私は望みます。この記事のコピーを、聞く意志のある人なら誰にでもあげて下さい。そうすることで人の役に立つことが恐らくできるでしょう。ジョン・F・キプリー

安楽死

『安楽死とは患者がかかっている病気によってではなく、医者によって死にいたることであり、端的に言い表わすことができます』

安楽死が何を意味し、どのような影響があるかについて多くの議論があります。その言葉が意味するものは安らかな死であるとか、尊厳ある死であるとか言われています。また積極的安楽死、消極的安楽死のことも語られています。尊厳ある死に方をする権利があるとも言われています。

その結果として、一つにはそのテーマの難しさのために、また一つにはこのことで個人的に一番利益を受ける人々によって意図的に造り出されている混乱によって、人々は安楽死が実際に何を意味するかがわかっていないのです。

安楽死の歴史

歴史的に見れば、安楽死の問題は、医学が始まって以来ずっと

とあったのです。確かに、古代においては、医者が様々な毒物を調合して患者を死に至らしめることが頻繁に行なわれていました。そしてこのことは医学に大きな問題を投げかけていました。患者の立場からすれば、医者が自分を治そうとしているのか、殺そうとしているのかわからないことは大変困ったことであつたに違いありません。その問題のことを認識したのは紀元前二三百三十年ごろに死亡したヒポクラテスという非常に卓越したギリシャの医者でした。ヒポクラテスは有名な医学の教師で、「私はたとえ求められても患者に有害なものを与えることはいたしません。」という宣誓を全ての生徒にさせました。

このことは医学の大きな進歩でした。というのはそれが殺人と医学を分離させたからでした。そしてやっと医学の進歩が可能になったのでした。最終的にヒポクラテスの宣誓として知られるようになったその宣誓のメリットはすぐに明らかになり、ヒポクラテスの宣誓をすることは当時の医者にとっては当然のこととなり、それは今日までおよそ二千三百年の間、ずっと行なわれてきているのです。

この道徳的規範、この医学の倫理がキリスト教より三百年近くさかのぼること、従ってそれ

が現在も守られ実践されている世界で恐らく最も古い道徳規範であることは、注目に値する興味深いことです。

何世紀にもわたって、全ての国の法律体系、宗教倫理、そして医学的倫理規範は、安楽死は非合法的、非倫理的なものであるとしてきました。そして安楽死は世界中の至る所で非難されてきました。

歴史的には、二人のドイツ人が一九二〇年に、「価値のない命の破壊行為の公認」という本を出版する比較的最近まで、安楽死の問題が再び注目すべき重大な問題になることはありませんでした。その著者は法学の教授であり哲学博士である弁護士のカール・ビンディング博士と、医学博士で精神科医のアルフレッド・ホツ博士でした。

彼らが用いた論拠とは今日用いられている論拠と全く同じものでした。つまり、それは「思いやり」というものだったので、彼らは人間が苦しみながら死ななければならぬのは残酷である、だから死ぬという行為の期間を短くすることは許され、人間には尊厳ある死に方をする権利があると仰いました。彼らはまた、安楽死の対象として彼らが「役に立たない白痴」と呼んだ子ども達、今なら精神的、肉体的に発達の遅れた子どもと呼ばれ

る子ども達をも含めていました。価値の無い人間を殺すことを主張した本が一九二〇年出版された後、慢性的な病気の人の対する、伝統的な思いやりのある19世紀の考え方に反対し、この破壊的な考え方を取り入れることに賛成する趣旨の宣伝が頻繁に行なわれました。つまり、もしある人が死んだほうが幸せだと判断されたならば、その人は殺されるべきだという考え方で、映画や本やさらには学校での子どもへの教育を通して、安楽死の経済的なメリットについて宣伝活動が行われました。

ドイツにおける

安楽死

一九三六年までに、肉体的、社会的に不適な人間を殺すことは大つばらに認められていたので、そのことがドイツ医学ジャーナルに書かれたほどでした。

ドイツにおいては、安楽死が特に何の法的措置もとられることなく広く行なわれていました。

安楽死を公認する唯一の文書は一九三九年十月にヒトラーの個人的な書簡に書かれた手紙ですが、それは戦争の最初の日にさかのぼるものでした。

それは任命の手紙であり、それには「ライヒスライター・ポー

ラー」とブランド医学博士に治療不可能だと判断される人間は、病状を慎重に診断したうえで、安楽死させることができるよう、指名された医師の権限を拡大させる責務を委ねる。」と書かれてありました。安楽死は法律で止めることが全くできないほど広まっていた。

第二次世界大戦中、ドイツがオランダを占領している間、ドイツ軍はオランダ人の医師に、公務として患者の治療にあたることに同意するように命じました。オランダの医師達は、このことにはユダヤ人計画に關与することが含まれることになること察知し、オランダ中の全ての医師がそれを拒否しました。するとドイツ軍は彼らの医師の免許状を取り消すと脅迫しました。そこで全てのオランダの医師が免許状を返しました。説得したり、脅迫したり、ドイツ軍はいろいろな方法を用いました。その中には百人ほどの医師を収容所送りにも含むことも含まれていました。しかし、オランダの医師達はそれでもがんとして協力を拒否しました。約50年後の今、オランダ人は、医師としてのあり方を見失い、安楽死を行なっているのは驚くべきことです。

医学協会

世界医学協会は一九八七年に、そしてイギリス医学協会は一九八八年に、安楽死に関する状況を再調査し、それに反対する立場を再確認しました。数ヶ月前にオーストラリア医学協会の連邦審議会が80対1で安楽死を却下したことも注目すべきことです。

安楽死を支持する人々の動機は推測することしかできませんが、確かに純粹な思いやりの気持ちから生じていることもあります。そして、死が間近に迫っている友人や家族に対する医療の質の低さを直接経験したことによる怒りやフラストレーションの気持ちから生じている場合もあります。

ドイツにおける

安楽死の影響

ドイツにおける安楽死の状況をふりかえって見ましょ。

最初は、安楽死の対象となつたのは末期患者と精神的肉体的障害のある人々でした。最顕症期にある精神分裂病と妄想性の精神病患者と、深刻な精神的肉

体的障害を持った子どもつまり白痴の子どもだけでした。最初は3才以下の子どもだけでしたが、それから年令制限が8才、12才、17才へと上げられました。

幼い子どもは食物に鎮静剤を混ぜる割合をだんだん多くしていくことで、大きい子どもは注射によって、そして後にはガスで殺されました。

これらのことは全て、自らを社会医学の先駆者だと思つてい

る医師達によって行なわれました。殺された人々の総数はわかりませんが、実際その中には3万人以上の知的障害者が、また耳の奇形、慢性的夜尿症、問題行動、教育困難、顔色が非常に黒い、黒い目などのような理由で殺された子どもが百万人以上いたことは確かです。

これらのことは第二次世界大戦前に行なわれたことですが、一九三九年には、ヒトラーとナチス政府が殺人計画を、ユダヤ人やロシア人やジプシーやポーランド人や非アリア人などの劣っていると見なされた民族へ、そして最終的には、政治的に対立しているドイツ人や同性愛者や第一次世界大戦で手足を失つた人々や老人そして病気で働けないものまで広げたのです。それから捕虜収容所の囚人に対して、彼らを殺す前に全く残

酷で非人道的な、科学的には価値の無い医学的な実験が行なわれたのでした。

これらの人々は、生存時間や、蘇生の技術を調べるために、雪の中に埋められたり、氷水の風呂の中に裸で浸けられたりしました。エックス線の照射、不妊手術、マスタードガスや、マリヤ菌や、様々な毒物や、石炭酸の注射や減圧室などを使った実験をはじめとする多くの実験が行なわれました。

ベルゼンの強制収容所にいたコツホという名前の女性は、「ベルゼンの獣」という異名をつけられました。彼女が行なつた残酷行為の中に、珍しい刺青をした男性を殺させ、彼らの皮をしながらかきして、ランプのかさにしたというのがありました。ベルゼンの収容所だけで毎日九千人をガスで殺し、火葬することができました。第二次世界大戦の終わりまでに、殺された非常にたくさんの人々のうち、ユダヤ人は六百万人を超えました。戦後、約二百五十人のドイツ人が非人道的犯罪を犯したことで告発されました。半数近くの人々が絞首刑にされ、また半数近くは証拠不十分で無罪とされ、残りの人々は様々な判決を受けました。

オランダ

オーストラリアにはオランダにならつて安楽死を合法化すべきたと言ふ人々がいます。オランダでは安楽死が広く行なわれているけれども、法律は変わっていないのです。安楽死は「注意を要する医療」または「死の援助」として偽つて行なわれているのです。オランダでは、直接死に至らしめるものであれ、または自殺の補助であれ、安楽死は形式的には合法化されておらず、現政府はその方針を変えつつもりはないと表明しています。その立場は、安楽死は犯罪であるが、適切な手順で行なわれたならば、起訴されることはないという点において非常に奇妙なものです。起訴された人々は普通有罪と認められますが、刑が科せられることはありません。

一九七〇年代に、ある女性医師が、母親からの要請によって、モルヒネの過剰投与で母親が死ぬような措置を取りました。一九七三年二月二十一日、注射を射つた医師は有罪になり、執行猶予のついた一週間の禁固刑が言いわたされました。

集中治療病棟の三人の昏睡状態にある患者を、親族に知らせず、その同意も得ずに毒物を注

射して殺した看護婦は殺人罪で告発されました。その事件は安楽死に対する考え方に関する、看護婦と患者との間のコミュニケーション不足という理由で棄却されました。その看護婦は懲戒を受け、執行猶予付きの拘留二年を言いわたされましたが、それには、二年以内に同じ罪を犯さないという条件がついていました。

ドイツ政府からの委託を受けた調査のレンメリンクレポートの一九九一年版によると、一万五百五十八件の安楽死が行なわれ、その内の55%は自発的なものではない、つまり患者は同意しておらず、自分の身にとどのうなことが起ころうとしているのがわかっていなかった、ということです。このことが病院で行なわれたときには、45%のケースで安楽死が、患者自身が知らないばかりか、患者の親族さえ知らないで行なわれているのです。

老人の患者は病院に行きたがらず、医者に診察してもらつてとを拒否していると報告されています。

(続く)

私達が言へば言葉とは？

先日、ある女性の中絶体験にまつわる記事を読んだ。35歳で重度の精神障害をもつその女性は養護施設で暮らしていた。体重は52kg、意識もない、かなり危険な状態の、俗にいう植物人間だった。ある男性が彼女と性交渉をした結果、彼女は妊娠した。事実が発覚した時すでに21週目に入っていた。法律上の保護権を有する彼女の両親は中絶を希望した。手術をしてくれる医師がなかなか見つからず、数日後

手術が始まって24時間後、胎児が生きたまま摘出された。集中治療室の中の女性は、中絶の後遺症からかなり苦しそうな様子だが、命に別状はない...という話だ。

よる妊娠という点でも中絶はやむをえないというのが大半の意見だった。これに対し、私達が反対と口をはさむことなど出来るだろうか。もちろんできる。以下の理由をあげることによって！

第一に、いかなる中絶も、罪のない無力な子どもを生まれる前に殺すことに代わりなく、そんな殺人に対し、私と同様に憤りを感じてほしい。だが、もしその子どもが障害をもって生まれていたらしたら？記事中には特に触れられていなかったが、その可能性はあった。答のかわりに反対に質問したい。子どもに異常があるとわかったら、生まれただけでもその子を殺しますかと。おそろくできないだろう。ではほんの少し異常の可能性があるだけで、なぜ生まれる前にその子を殺してしまうのでしょうか？同じ赤ちゃんで障害の可能性も同じなのに。そして母体への負担はどうだろう？彼女は妊娠中期に入っていたことを思い出して欲しい。この段階での中絶は、臨月を待つて出産する十倍も母体にとって危険である。母体の安全を優先して考えたなら、中絶はおのずと除外される

はずである。

最後に、彼女は自分自身のおかれた状況も、レイプも中絶の事も、何ひとつ知らない。レイプに関して何か意思表示したわけでもない。感情を荒立てているのは周囲の人間だ。実際のところ、自分の妊娠に対処する能力は彼女にはない。結局、周りの人間が、彼女の生命の危険を冒してまで胎児を取り出したのである。その赤ちゃんを養子として愛したい何百もの夫婦がいるのに中絶する必要があったのだろうか。

ノボトニー・ジェリー

胎児の日記

十月五日：今日私の命が始まった。両親はまだ知らないけれど、私はりんこの種程小さいけれど、でももう存在するんだ。そして私は女の子になる。黒い髪で茶色い目。もう私がどうなるかはすべて決まっているんだ。花が大好きになるって事も。同じ様に、私がどういふ身体になるかの遺伝子もちゃんと決まっているんだ。後は私の存在が美しいシンフォニーであるとわかる。時間と栄養と愛が必要なだけで。

十月十九日：何人かの人、私はまだ本当の人間じゃないって、お母さんだけが生きていて、私はお母さんの身体の一部であるだけだと言う。そんなの科学的、形而学的に不可能だ！私は小さくても実在の人間なんだ、パンのかげらだつて見かけは細かくても本物のパンであるのと同じに。お母さんが実在しているのと同じ様に、私だつてしているんだ。

十月二十日：お母さんは、私の事欲しくなくて、まだ私の存在を知らないんだけど、「避妊薬」などを使い始めた。今日お母

さんの経口「避妊薬」(OC)は、排卵も、お父さんの精子がお母さんの卵子と結合する事も止めなかった。その替わりにお母さんの子宮内膜を私にとってても植え付くにくくして、私はお先真っ暗になった。私はお母さんの子宮の壁にしがみつこうとしたけれど、出来なかった。効力のあるステロイド剤は、この神の小さな創造物が打ち勝つには強すぎたのだ。私はお母さんのOCで科学的に中絶され、トイレに流されてしまつた。

お母さんは、OCを飲んでいるから私は出来ていないと誤解して、生理不順だと思つた。後三日で私の口は初めて開いたのに。後五日で私の心臓は脈を打ち始めたのに。どうして私の事欲しくないの、ママ？私みたいな子どもをいつ、何人産むか、神様よりわかっているつもりなの？私はまだ未熟だけど、ママを愛しているし、ママだつて私を愛せる様になるよ。なのにどうして、ママ？今日、お母さんが私を科学的に中絶した。

四人目の子ども

以前、近所に住んでいて、今は他の州に引っ越してしまつた知り合いから、四人目の子どもの誕生を知らせてきました。

私はそのニュースを共通の知人に知らせました。

その共通の知人の顔に浮かんだ表情を見たら、前の知り合いの子ども達が全員突然変異して怪物になつたとも聞いたかのようにでした。少なくとも、それに近い悲劇が起こつたかのような反応を示したのです。

「一たいどうしたと言うの。」と私はききました。

「あなただつたら、四人も子どもを育てたいと思う？」彼女はやり返してきました。

私は考えました。前の知り合いは私にそうしろと勧めたわけではないけれど、送つてきた彼女の家族の写真を見ると、ご主人も子ども達も幸せそうだ。彼等は新しい一員にまつたく満足して、これっぽつちも不満のかげりも見えない。

友人の見当違いの質問に答えるかわりに、私はこう言いました。「私、四番目の子どもだけだ。」彼女は何も言ひ返すことが出来ませんでした。

これは二年前の出来事です。

このときの相手の友人とは度々会いますが、二度とこの話題には触れようとしません。私自身はよく考えることがあります。近年の子どもは二人までの家族形態を見ると、四番目の子どもであつた自分が、急激に消えつつある人類の生き残りだという気がするからです。

最近出席した結婚式で、男の子と女の子が一人ずついてまた妊娠している女性の話しをもらい聞きました。

「この三人目の子どもが男の子だつたら、卵管結さくするつもりなの。男の子は男兄弟が必要だからね。女の子と違って。」

私は思わずドキリとしました。私は兄弟の中で唯一の女の子でした。兄達も好きでしたが、それでも女の姉妹にあこがれたものです。女の子には女の姉妹がいらないなんて、この若いお母さんはどこから思いついたのかしらと思わずにはいられませんでした。

二、三週間前、四人目の子どもがお腹にいる別の友人が、近所の人に又妊娠したことを叱られたそうです。

「妊娠するべきではなかつたのに。」とその女性は言つたそうです。

既に子どもが二人以上いる女性が、計画的に妊娠したり、予定外の妊娠を受け入れたりすると、なぜこんなふうになつたのか、産む権利に異議を唱えたりするのでしょうか。

人口計算学者やその言葉を伝達するメディアが、二人の子どもが理想的な家族形態だと思わせたのです。これは、子どもが三人以上いる家庭に対する差別を作り出しています。

ここではつきりさせておきましょう。三番目の子どももその後の子どもも、最初の子とも達と同じ人間なのです。二人の子どもより多くの生命を送り出す幸せを分かち合おうと決めた夫婦を指さして批判する権利は誰にもないのです。

エレン・マラー・ガルシア

23週目の手紙

中絶賛成論者が近頃喫した決定的敗北

それはサンフランシスコのカルフォルニア大学でなされた新たな方式の胎児の手術についての発表に端を発した。おそらく皆さん方もその記事を読まれたと思う。その胎児は妊娠23週、月にすると約5ヶ月の女の子で、むろんまだ母親の子宮内にいた。赤ん坊は腎臓に異常が見られた。尿道閉そくである。尿道が非常にせまめられていたために、羊膜中の羊水が十分に生成できないでいるといった健康状態だつた。

通常の胎児の成長と発達に必要最低量の羊水は欠かせない。筋肉や骨の発達を助ける身体の運動を妨げないようにするため、羊水は一定量必ず必要であり、又、肺の組成及び正常な発達のために欠かせない。その赤ん坊の小さなおうちである母親の子宮がその子の周りに今やがら崩れ落ちておき、状況は一刻を争つた。

赤ん坊はおよそ1.5パウンド(約600)程度だつたらうと思われる。そして、御存じのように、これほど早期の未熟児の生存可能性は極めて低い。

チーフ手術医であるマイケル・

ハリソンは何か手を打たねばと思つた。彼は帝王切開の時やるように母体の腹部をまず切開し、それから子宮を切開した。まず小さな両脚を、そして下半身全体を子宮内から取り出した。へその緒はそのままにしておき、母親から直接栄養や酸素を取り入れ続けられるようにしておいた。

そつして、今度は赤ん坊の下部を注意深く切開し、膀胱を切り開いた。切開部を広げると膀胱部を取り出して、赤ん坊の小さな腹部の上に置き、そこに縫いつけた。そして尿が赤ん坊の身体から排出されるよう永久的な通り道を切開して作り出した。ハリソン医師は赤ん坊を子宮内に戻し、子宮を縫合し終えらうとまくいくよう祈つた。想像するに他の関係者も祈つていたに違いない。

奇跡中の奇跡。母親の女性はその後問題なく過ごした。赤ん坊の女の子は成長し続けた。小さなミシエル嬢は後に正常分娩によつて出産され、順調に育つていった。生後一年して、手術した医師は腎臓の問題部を手術し、人工の膀胱の切開部を閉じる整形手術を施した。

さあ、では一つ明らかになつてきたのではないかな? 胎児は人間ではないと言つてる人は完全なる勘違いをしているか、うそをついているんだつて事。

J.C. ウィルキー 医学博士

中絶手術の残したもの

私の記憶では、これから述べる事は家族が夕食のテーブルについたある夜の事だったと思います。中絶手術のことが話題にのぼっていました。中絶の合法化の問題が毎日のようにマスコミに取り上げられていた時期でした。中絶、十代の私には初めての言葉でした。

末っ子で一人娘の私は、その話題が持ち上がったすぐに、家族の秘密を知る事になりました。私達は三人兄妹でしたが、もし母が五人中絶していなければ、本当は八人兄妹だったのです。両親は、中絶手術とその合法化を支持するという大胆な発言をしました。その後、議論は数週間、数ヶ月も続き、結果として私は彼らの「論理的」な考え方に同意して、中絶合法化に賛成する旨のレポートを高校で書きました。

プロライフの本や記事は、「中絶のホロコーストによる被害者」について取り上げています。そこでは、罪なき胎児の受けるトラウマ(心的外傷)や母親の感情の構造について詳細に述べられています。中には、自分の子どもが生まれるのを見たという父親の権利についてふれた記事もあります。これらのことからわかるように、中絶は家族の問題なのです。

私は、広い目で話したいと思います。ただでさえこの世の中は苦しみに満ちているのに、この上「犠牲者」の話など、もう

聞きたくないのが当然です。しかし、中絶で兄弟を亡くした者として、消えた家族のイメージを受け継いでいく者として、私はここで一つだけ、皆さんに聞いてもらいたい事があります。

望まない妊娠をした両親のどつた態度を私はここで公表する事で、両親の名誉を傷付けようとしているのではありません。しかし、まるで歯を抜くのと同じ位簡単に中絶を考える家庭に育った子どもは、生命の尊厳に対する両親の無関心さに傷つけられているのです。ここでの私の意図は、「中絶はプライベートな事で、当事者の女性以外は誰も影響を受けない」という中絶支持者の主張に対し、中絶手術の余波について述べる事にあります。もう5〜60年前に行われた私の両親の中絶の余波が、いまだに私の中に残っているのです。5〜60年前に罪であった事は、今日でも罪であり、合法化する事で罪を正当化しようとする人々がいたとしても、殺人が殺人である事に変わりはないのです。そしてその影響は家族全員に広まっています。

私の場合も、無意識のうちに私の心に拒絶と不信が入り込んでいきました。心に受けた見えない傷は、安全で愛情あふれる家族と一緒にいたいという私の自然の本能を蝕んでいました。中絶は、生きて

いる兄弟にも見えない傷を残します。子どもを愛し、守ってくれるはずの親の愛への信頼と絆を破壊してしまうのです。こうして私と両親の間の距離は、徐々に離れていきました。

私は、求めていた答えを少しずつ見出しつつありました。子ども心になぜ空しさを感じていたのか、やっと理由が分かりました。それは、神様が私達に用意して下さった兄弟達とのふれあいを、中絶によって失ったからだったのです。そして、生まれて来るはずだった兄弟達に対する両親の態度が、なぜ私に親の愛情に対する不信を抱かせたのか、理解出来るようになりました。それが、常に私が感じていた罪悪感の理由でもあるかも知れません。

母はよく私にこう言いました。「もしもつとたくさんの子どもがいたら、あなたに今ほどのものを与えられていなかったと思うわ。」その時の私は、望まない妊娠をした女性としての母の難しい決断を、では私がいなければ家族はさらに楽な生活ができるのではないかというふうに考えました。そこで、できるだけ早く自立するという結論を出し、一生懸命努力して、18歳までに自活出来るようになりました。

私の生命に対する考えは、中絶を支持する家庭教育のせいですっかり汚されてしまいました。私は生命の価値を知りません。なぜならその模範を示された事がないからです。

テレビでよく、「私の愛する家族を探して」とか、「離散した家族と再会したい」という番組を見ます。養子として引き取られた人や、家族と離れ離れになった人な

ど、両親や兄弟を探している人はたくさんいます。現代の発達した技術を駆使すれば、彼らの再会も夢ではありません。しかし、中絶された兄弟とは、天国で会うまで再会の希望はないのです。

リンダ・グレノン

マテオによる福音書一八：5-9に、「こう述べられています。「また私の名のために、こういつ子どもを受け入れる者は私を受け入れる。もし私を信じるこの小さな者を一人でもつまずかせたら、その人はろばの挽き臼を首にかけて海の深みに沈められるほうがよい。」
どうして五人もの子どもを中絶したのかと母に尋ねたら、彼女はこう答えました。「これ以上子どもを育てる余裕がなかったし、私か外に出て働きたかったからよ。死んだのは本当の赤ちゃんじゃないわ。どんぐりがまだ溼い木じゃないのと同じよ。」

望まない妊娠をした両親のこうした態度を私はここで公表する事で、両親の名譽を傷つけようとしているではありません。しかし、まるで歯を抜くと同じ位簡単に中絶を考ええる家庭に育った子どもは、生命の尊厳に対する両親の無関心さに傷つけられているのです。ここでの私の意図は、「中絶はプライベートな事で、当事者の女性以外は誰も影響を受けない」という中絶支持者の主張に対し、「中絶手術の余波について述べる事にあります。もう50年前に行われた私の両親の中絶の余波が、いまだに私の中に残っているのです。50年前に罪であった事は、今日でも罪であり、合法化する事で罪を正当化しようとする人々がいたとしても、殺人が殺人である事に変わりはないのです。そしてその影響は家族全員に広まっていきます。」

私の場合も、無意識のうちに私の心に拒絶と不信が入り込んでいきました。心に受けた見えない傷は、安全で愛情あふれる家族と一緒にいたいという私の自然の本能を蝕んでいました。中絶は、生きている兄弟にも見えない傷を残します。子どもを愛し、守ってくれ

るはずの親の愛への信頼と絆を破壊してしまふのです。こうして私と両親の間の距離は、徐々に離れていきました。

私は、求めていた答えを少しづつ見出しつつありました。子ども心になぜ空しさを感じていたのか、やっと理由が分かりました。それは、神様が私達に用意して下さった兄弟達とのふれあいを、中絶によって失ったからだったのです。そして、生まれて来るはずだった兄弟達に対する両親の態度が、なぜ私に親の愛情に対する不信を抱かせたのか、理解出来るようになりました。それが、常に私を感じていた罪悪感の理由でもあるかも知れません。

母はよく私にこう言いました。「もしももっとたくさんの子どもがいたら、あなたに今ほどのものを与えられていなかったと思うわ。」その時の私は、望まない妊娠をした女性としての母の難しい決断を、では私がいなければ家族はさらに楽な生活ができるのではないかというふうに考えました。そこで、できるだけ早く自立するという結論を出し、一生懸命努力して、18歳までに自活出来るようになりました。

私の生命に対する考えは、中絶を支持する家庭教育のせいですっかり汚されてしまいました。私は生命の価値を知りません。なぜならその模範を示された事がないからです。

テレビでよく、「私の愛する家族を探して」とか「離散した家族と再会したい」という番組を見ます。養子として引き取られた人や、家族と離れ離れになった人など、両親や兄弟を探している人はたくさんいます。現代の発達した技術を駆使すれば、彼らの再会も夢ではありません。しかし、中絶された兄弟とは、天国で会うまで再会の希望はないのです。

リンダ・グレノン

事務所たより

一年のうちで一番寒い月を迎えましたが、皆様にはお元気で過ごしてでしょうか。お伺い申し上げます。

カトリック新聞の一面と「日本プロ・ライフ・ムーブメント」の11月号のちらしでお知らせいたしましたデュプランティス薬学博士による「経口避妊薬ピルと女性の健康」についての講演会が、名古屋の眼科医・平田国夫様のお骨折りで11月30日から順次、東京、名古屋、長崎、福岡で行なわれました。日本プロ・ライフ・ムーブメントの事務所からも代表者のノボトニ先生が東京会場へ出席されました。高知に帰られてからのお言葉は「折角、遠いアメリカから講演者が来られているのに、日本側の参加者が予定していたよりも少人数であったのが、とても残念だった」と申されていました。また、その時の講演内容を「日本プロ・ライフ・ムーブメント」の紙面で皆様に御紹介いたします。

11月29日には高知で高知県看護協会主催、高知県中央保健所の保健課長・岡田医師の司会による地域母子保健フォーラムが開かれ、友達三人といっしょに大岡が参加しました。「子育て支援ネットワーク」あなたは子どもに性を語れますか」という副題でしたが、北村邦夫医師が基調講演をしました。北村邦夫医師は日本家族計画協会クリニク所長なので、プロ・ライフの立場ではないことを重々承知の上で、必要な時は反対意見をのべたいと考えての参加でした。話がすすむにつれて、ピルのことを推奨してきたのではないかと思えるようになり、また、「胎児はどこに宿るの?」と聞かれた前列の女性が「お母さんのお腹の中」と答えると、「お母さんのお腹の中ではなく、女性のお腹の中なんだよ。そして、女性が産むか産まないか決めるんだ。」とか言って、「胎児」という言葉は出産の意志が母親にできてから、「赤ちゃん」に変わるものであることを教え込まれ、「赤ちゃん」は殺せないけれど、「胎児」は中絶して良いとする一足先に生まれ出たものの身勝手さ!「胎内の子どもも生まれ出た子ども一つの命の流れの中では同じ一つの命なのに。もちろん、プロ・ライフの立場を表明してきたもの何とも空しい時間でした。看護協会主催だから命を大切にすることが伝えられて、当り前なのに...